保護者のための
特別授業

2時間目

教育・学力

テストの点以外も評価対象に！これって皆さんの子どもにはチャンスですか？ ピンチですか？

さて、Q問題です!!

この問題、解けますか？

問3 明子さんと太郎さんは，なぜ江戸幕府が滅亡したのかを考えた。その結果，滅亡までの十数年間に，幕府が統治能力を失う重大なできごとがあり，それが幕府滅亡への画期（ターニングポイント）になったとの結論にいたった。明子さんは，年表中の(イ)のできごとを画期ととらえた。太郎さんは，年表中の(イ)のできごとを画期ととらえた。あなたは，どちらの考えを支持するか。支持するできごとと理由を正しく組み合わせよ。できごとは次の①・②のうちから，理由は下の①～④のうちから一つずつ選べ。

できごと 20
① 年表中の(ア)のできごと　② 年表中の(イ)のできごと

理由 21

(ア)のできごと
……桜田門外の変

(イ)のできごと
……第二次長州征討
（長州戦争）

※独立行政法人大学入試センター「大学入学共通テスト」試行調査（平成29年11月実施分）「日本史B」より抜粋。問題の続きは欄外参照

上のQは、「大学入試センター試験」（以下、センター試験）に代わって来年から始まる「大学入学共通テスト」に先駆けて実施された、試行調査で実際に出された問題です。暗記している知識で答えられる問題だけでなく、初めて見る複数の資料を合わせて検討したり、自分の考えがないと答えられない問題が、全教科に導入されます。上の日本史の問題は、「できごと」は実は、(ア)、(イ)のどちらを選んでもよく、次に選ぶ理由と合致していれば正解という、答えの組み合わせによって正答が複数ある形式の問題になっているのです。

成績優秀者＝実社会の実力者とは限らないですよね？

なぜこのように、子どもの進学に関わる大事な一斉テストが変わるのか。それはこれからの時代に求められる力が変わってきているからに他なりません。

皆さんも実社会の中で、学校の成績が良かった人や、いわゆる難関大学出身者が必ずしも仕事ができるわけではない、となんとなく感じたことがあるのではないでしょうか？ 知識がたくさんあるだけではダメだと。そこをちゃんと科学的に見ていこうと考え始めたわけで、これは日本だけではなく、世界的な流れです。

もうひとつ、今の時代、知識を覚えたり公式を使って解くだけならAIの方が強い。そういう仕事は取って代わられるようになり、AIにはできない、人とコミュニケーシ

でも、勉強できる子がいい大学入って就職も有利なんじゃ…

Profile
独立行政法人大学入試センター
試験・研究統括補佐官（兼）審議役
白井 俊氏

2000年、文部省（現・文部科学省）入省。経済協力開発機構（OECD）教育スキル局アナリスト、文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長等を経て、2019年より現職。大学入学共通テストの問題の作成・開発に携わっている。

※「大学入学共通テスト」試行調査（平成29年度実施分）の全問は以下で見ることができます。
https://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/pre-test_h29_01.html

取材・文／長島佳子

ョンを取る力や、人と一緒に新しいものを創る力や、粘り強さなどが重要視されてきます。それを「非認知スキル」とか「ソフトスキル」と呼んでいます。

教科も含めた教育活動で知識＋αの力も育んでいく

でも、実はこれは、日本の教育では「知・徳・体」と言われて、昔からあった考え方なんです。ソフトスキルは「徳」と重なる部分が多く、その重要性が「知」や「体」とともにクローズアップされてきたということです。

ただ、今までソフトスキルは部活や行事、道徳の時間なども含めた学校教育全般の中での位置付けが必ずしも明確に示されていませんでした。新しい学習指導要領（平成29・30年告示）では、それを各教科においても明確に規定し、しっかり育んでいこうとしているのです。

その考え方を整理したのが、図3の育成すべき資質・能力の三つの柱です。保護者の皆さんの時代には「知識・技能」がより重視されていたかもしれませんが、「思考力・判断力・表現力等」はもちろん「学びに向かう力・人間性等」も同じように重視していこうとしています。

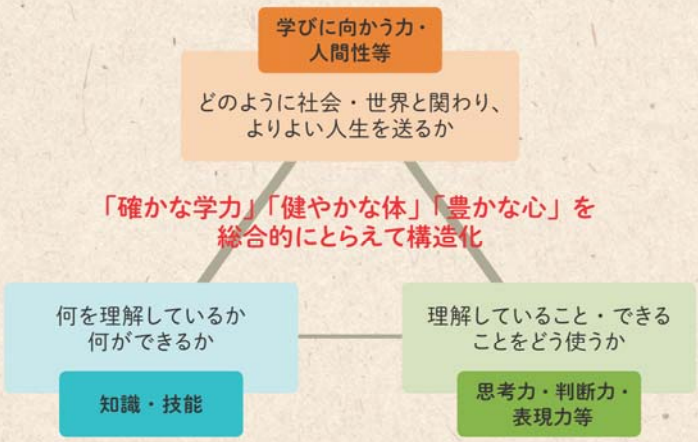
ホームルームで校則を議論するのも立派なソフトスキルなんです

保護者が体験したことのない授業がすでに行われている

資質・能力の三本柱を育むために、学校教育の現場も保護者の皆さんの時代とは変わってきています。その一つが、先生が一方的に教えるのではなく、生徒が主体となって学ぶ「アクティブ・ラーニング」という授業方法です。生徒が自分で考え、それを表現してみんなに伝えたり複数の考えをまとめたりする力を育むために、授業中に調べる作業をしたり、グループワークやディスカッションを行うなどさまざまな形式で、あらゆる教科で取り入れられています。

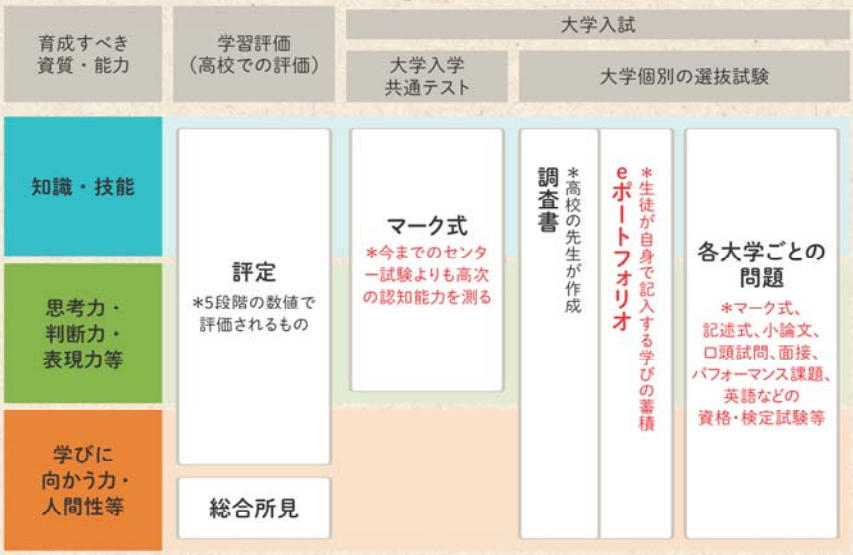
また、「総合的な探究の時間」も保護者の時代にはなかった授業。教科の枠にとらわれず、自分自身が気になる課題や興味のあるテーマを設定して、それについて調べたり、解決策を考えて発表する、大学のゼミや卒業論文のような授

図3 育成すべき資質・能力の三つの柱

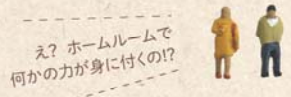


※出典：文部科学省「新しい学習指導要領の考え方」より編集部にて作成

図4 資質・能力をどう測るか、評価・入試の新しい仕組み（赤字分が現在と変わるところ）



※白井氏講演資料「新学習指導要領と大学入試改革」より編集部にて作成



業も行われています。

ソフトスキルを育むためにより重要視されるべきなのが、ホームルームなどの特別活動。ホームルームは本来教育活動にはとても大事な時間で、例えば最近話題になっている「ブラック校則」について、子どもたちが客観的に考えておかしいと思ったら、みんなで話し合って、学校に提案して変えていけばいい。それは今後、社会に参画して、社会を変えていく力の基盤になると思うのです。

知識・技能以外の力をどのように評価するか

身に付けるべき資質・能力や教育内容が変わると、気になるのはそれが学校の成績や入試できちんと評価されるのか、ということだと思います。そこで、従来のようにペーパーテストの点数だけでなく、多面的・多角的に子どもたちを評価しようとしています。それを表したのが図4です。

資質・能力の中で「学びに向かう力・人間性等」がソフトスキルに重なりますが、それをどのように評価するかが最も難しく、わかりにくいところだと思います。なぜなら場面や状況によって評価が変わるからです。例えば「あの人は協働性があるよね」と言われても、同意しない人もいるかもしれない。リーダーシップも大事な力ですが、全員がリーダーではまとまらないので、「リーダー役もできるけれどここではフォロワーになっておこう」と判断する場合もあります。粘り強く物事に取り組む力も、あればあるほどいいというものではない。つまり、評価には、場面ごとの子どもの情報をたくさん集める必要があるのです。

大事なのは、その評価によって子ども自身が自分の理解度や長所・短所に気づくこと。それを「メタ認知」と呼ぶのですが、メタ認知ができるようになると、勉強の仕方を試行錯誤して、次の成長への創意工夫ができる。つまり「学びに向かう力」につながります。部活動でスポーツにしても、楽器の演奏にしても、もっとうまくなるためにどうしたらいいか考えて練習しますよね。それと同じなのです。

また、ポートフォリオという、子どもたち自身が自分の学びの足跡を記述し、蓄積していく試みも始まっています。子どもたち自身が、自分がどんなふうに学んで成長してきたかを振り返ることができるツールで、これもメタ認知につながります。

教育改革は子どもの多様な力を評価してあげるため

「大学入学共通テスト」で英語民間試験や記述式問題が白紙になり、「マーク式だけならセンター試験と変わらないのでは?」と思われた方もいるかもしれません。しかし、今までお話ししてきたように、これからの時代に求められる資質・能力が従来とは変わるため、冒頭の日本史の問題のようにマーク式でも「なんとなく知っていればできる」ような問題ではなく、「深く理解していたり、よく考えないとできない」問題に変わり、センター試験よりも、より高次の「思考力・判断力・表現力等」が求められるようになるのです。

また、大学個別の選抜試験では、学校が評価した評定や所見(調査書)だけではなく、生徒本人が作成したポートフォリオ、個別の学力試験や面接、志望理由書なども活用しながら、より多面的に評価するようになっていきます。

子どもたちにとっては、「知識・技能」だけでなく、多様な良さやがんばりを評価してもらえるのがこれからの入試、そして教育です。これはチャンスとも言えるのではないでしょうか。

↓保護者に求められること

家庭では、子ども自身が自分のもつ力や良さを認められるような声がけやサポートをたくさんしてあげたいですね。例えば、「勉強しろ」ではなく「最近学校の授業で面白かったことは? それはどうして?」などと質問することで、本人が自ら気づくきっかけをつくるといいですね。学力に対する価値観も違ってきているので、それを柔軟に受け止めて、自分の考えを子どもに押し付けないことも大切です。

テストや評価が変わるのは子どもたちにとってはチャンス!